＝書　評＝

『上海史——巨大都市の形成と人々の営み』

高橋孝助・古厩忠夫　編

水羽信男

I　上海を見る眼——本書のねらいと視角

上海は一九二〇年代末には三〇〇万人を越える人口を擁し、世界有数の都市に成長していた。本書はこの街に関して、主として一八四三年の上海開港から、改革・開放政策の進む今日まで、おおよそ一五〇年間の歴史を描いている。序章からはじまる本書の目次と、日本上海史研究会の会員である著者たちの執筆分担は次の通り。

序　章　上海史へのいざない（高橋孝助・高田幸男）
第一章　開港と近代都市の出発（高橋孝助）
第二章　上海人の形成と生活（曽田三郎）
第三章　西洋人の上海、日本人の上海（高綱博文）
第四章　上海人と都市行政（小浜正子）
第五章　「国際都市」のナショナリズム（金子肇）
第六章　抗戦と内戦の上海（石島紀之）
第七章　「解放」から「開放」へ（菊池敏夫・上原一慶）
おわりに（古厩忠夫）

著者たちは歴史学を基礎に、その他の学問領域にも学びつつ、上海に即して、つまり他の都市のイメージを上海に押し付けることなく、上海なりの政治・経済・文化・くらし等々をありのままに理解しようとした。本書はアールデコ風の装飾を施された高層ビルの林立する租界から、衛生環境の劣悪な中国人街（華界）のスラムまでを取り上げた。また外国語を操る上海人エリートから、文字の読み書きのできない貧民に至るまで、都市の様々な住人に関心を注いだ。本書がこの街の歴史を生き生きと描きえた要因である。

本書は清末以来の上海の貴重な地図、著者たちの精緻な実証に基づく表・図・グラフ、銀幕のスターや街頭風景の写真等を駆使した視覚に訴える構成となっている。叙述のスタイルも専門的な内容を簡潔かつ平易に表現している。各章末尾には読者の興味を引きそうな人物を選んで紹介した「Shanghai Who's Who」が、また巻末には「上海史年表」「参照・引用文献目録」「索引」がある。殊に高田・菊池による年表は幅広い情報を詳細に集めたものであり、有用といえよう。

したがって、限られた紙幅で要約を試みることは、本書の持つ多様で網羅的という優点を損なうことにもなろう。通常の書評とは異

なるが、本稿は各章の内容紹介をはぶき、評者なりに著者たちの上海を見る視角や方法を紹介し、本書の成果について学んでいくことにしたい。

本書のねらい

古厩忠夫[1]や本書序章が指摘するように、近年の日本の中国関連書のなかで「上海もの」は、一つの〝ブーム〟となっている。[2]

だが序章が危惧するように、大戦間期の上海を〝植民都市〟（＝「中国の中の西洋」）・〝魔都〟として、ノスタルジックに追想・幻想する人々には、当時の上海のリアルな姿を把握することは困難だろう。また日本をはじめとした諸列強に侵略された都市として、また個性的で独自な中国文化に育まれた都市として上海を捉えず、目前のビジネス・チャンスにだけ関心を持つ人々は、今の上海の動態の本質を正確には理解できまい。そして列強の支配に抵抗してきた〝革命都市〟＝上海の闘いの歴史に共感するだけでは、中国近現代史の現実とは切り結べない。

少なくとも昨今のブームが提示する〝上海〟像が、それぞれの論者のなかで一面的なものになりがちなことは、間違いないだろう。個々人の上海イメージが、「植民都市」、「摩登（モダン）都市」、「魔都」、「高度経済成長の中心都市」、「革命都市」等々へ分裂していく傾向も、決して弱くはないようだ。こうした状況認識に基づき、著者たちが統合的な「新たな上海史」像を再構築しようとしたのが本書であり、日本ではじめての本格的な上海通史となった。

なぜ上海史を研究するのか？ ―― 上海史の視角

この問いに対する明確な答えはないが、本書には中国近現代史上における上海史の重要性に関する次のような指摘がある。

上海はアヘン戦争の講和条約である南京条約に基づき、一八四三年に対外的に開港されて以後、租界を中心にして資本主義経済が発展していった。第一次世界大戦後の上海は、「列強の極東の権益の牙城」であるとともに、「全国最大の工商業基地」・「全国の金融センター」であり、「中国のブルジョアジーの本拠地」たる「中国経済の中心都市」となった。したがって上海は、中国のどの都市よりも「貨幣の安定、生産の回復等、全国的な経済的安定の面で決定的地位を占め」るにいたったのである。

また上海は「中国一の文化的センター」であり、「知識人のメッカ」として中国の民族主義・民主主義運動の中心地ともなった。

さらに一九一五年には、上海の在留外国人数で日本人が第一位になったことに示されるように、日本人にとってこの街は、日清戦争期以来、少なくとも五十年間にわたる日中の非友好的な関係を考えるうえで、避けることのできない都市である。

著者たちは、中国近現代史を理解するうえで不可欠の都市である上海の歴史を考えることで、従来の通説的理解の見直しをおこない、同時に日中関係史の実相に迫り、読者の対中国認識を深化させようとしている、といえよう。

なお序章などは、上海では「中国社会と西洋文明との対立・競合・融合を通じて『伝統中国』でも西洋でもない独自の『上海的な』都市文化[3]」が形成されたと述べている。さらに上海的な都市文化とその担い手＝上海人とが中国にとっての「未来への遺産」であり、この独自な文化が「中国全土に波及していく」ことを肯定的に評価し展望した。こうした上海の在り様を中国全体に押し広げようと考える視座を、どの程度、本書の著者たちが共有しているかは定かで

ないが、上海を将来の中国のモデルとみなす立場も、本書は内包している。

II　上海史の方法――本書の特徴と成果

本書は上海における都市社会および上海人の形成・発展の分析へ主眼をおき、次のような方法で分析を行った。

A　都市形成・発展の主体として都市中間層を措定する。

労働者階級と農民層を軸に叙述を進めてきた従来の中国近現代史の通説とは異り、本書は上海史を考える視座の中心に都市中間層を据え、そのうえで彼らと労働者階級・雑業層との関係に関心を払っている。

近代上海の最初の都市中間層としては、地主であり官職の保持者であった「紳商」たちが注目された。「紳商」層は中国資本の発展の中で経済力を強め、やがて「浙江財閥」へと成長してゆくが、上海の自治の形成により上海の支配層となった。[4] その後の都市中間層として、本書では里弄に住む俸給生活者（ホワイトカラー）や知識人に関心が集まっている。

B　都市における多様な人的関係について注意する。

いままでの研究では、都市における階級配置など近代的な支配・被支配の関係に分析の力点をおきがちであったが、本書は上海における前近代的な社会的結合である幇的結合など多様なネットワークの存在を前提に分析を進めている。その結果、明清期以来の秘密結社＝青幇の暗躍などにも目配りが可能となった。

また従来、上海における帝国主義支配とそれに対抗した中国側の民族運動の展開に大きな関心が払われていたが、本書は闘争の側面だけでなく、外国人と中国人との関係の常態も検討し、決して混ざり合わないモザイク的な状況であったことを実証した。[5]

C　都市形成・発展の規定要因として、農村と租界の果たした役割を重視する。

具体的には上海がリードする都市と農村の対抗的共存関係に留意し、上海を取り囲む農村部の存在が、都市の形成・発展を下支えしたメカニズムに注意を促した。この点は従来、充分に論じられてきたとは言い難い分析視角である。

さらに本書は上海を中国一般あるいは都市一般のなかに抽象化することなく、特定の固有な条件を持つ都市として捉えた。都市形成・発展にかかわる上海内部の問題として、共同租界とフランス租界という二つの租界と華界との関係に対する分析を重視したのである。

中国近現代史の研究史上、はじめて近代都市＝上海を専論的にとりあげた本書が持つ意義は、以上の三点にわたる都市史の方法論を採用したことにある。本書によって我々は、日本および欧米の近現代都市史を考える研究者とも、学問的な対話をすることが可能となった。

中国近現代史研究にとって、都市史研究の意義とは何か？

都市史研究の意義に関しては、成田龍一が日本都市史研究のなかで次のように指摘している。従来の研究が提示した「農村をモデルに構築された近代日本像が、日本社会の『半封建性』と『特殊性』を強調したのに対し、都市をモデルとした研究は「日本近代の『近代的』性格と『普遍性』に比重」をかけたものとなろう。[6]

成田的な問題意識は、おそらく本書の著者にも共通していたと思われ、たとえば第二章は、近代上海における最初の都市中間層である「紳商」層のナショナリズムの形成について、おおよそ以下のように述べている。

清末の「紳商」層の立憲改革をめざす活動は、租界当局の中国人統治の強化への反発を一つの要因としていたが、それだけでなく、彼らの上海への定着性の強まりを背景としていた。彼等は安定的・持続的な経済活動の実現を希求し、こうした彼らの内在的な要求からも国政レベルの変革を求めるナショナリズムを獲得した。またそれが立憲改革という方向を持ったことに関しては、新聞や雑誌を媒介とするメディアによる啓蒙が一定の役割を果たした。

第二章は外国からの圧迫に反応し、立憲改革という民主化を志向する「紳商」層の主体的条件の高まりが、都市形成そのものによってもたらされることを指摘している。こうした上海の「紳商」層にみられる「近代的」性格と「普遍性」とは、中国では上海に固有のものであったかも知れない。しかしながら都市形成にともなうナショナリズムと民主主義の形成に着目する分析は、上海を国際的な都市比較のなかで考えるための素材を提供したものと評価できよう。

また上海における近代の意味が、多義的であったことを明らかにしたことも、本書の注目すべき成果であろう。たとえば第四章によれば、大戦間期の上海でも自動車・電車などの近代的な交通手段とともに、人力車という前近代的な交通手段が存続しつづけた。また生活様式などの面できわめて西欧的・都市的な文化を受容しながらも、上海市民の少なからぬ部分は、青幇など前近代的結社とも深い関係を持っていた。

膨張し発展する近代的な都市を維持するために、近代的諸手段を充全には整備しえない上海人たちは、その不十分さを補うために、様々な前近代的な手段を活用したのである。その意味では前近代的なあれこれの手段・機構・ネットワーク等は、けっして単純に近代化を阻碍するものではなかった。

〝伝統と近代〟の複雑な絡み合いに関する第四章の指摘は、中国における近代の意味について考えるヒントとなり、究極的にはアジアにおける近代都市の問題を考える素材となろう。

上海の特殊性について

上海は他の国家・地域の都市と異なる特質を持っていただけでなく、中国国内のなかでも、きわだった特徴を持っていた。上海に見られる歴史的事象が、中国に典型的なケーススタディとして、そのまま全国レベルで適応されうるか否かについては、それぞれについて個別に検討する必要がある。

評者は上海の特殊性・例外性にかかわって、租界の持つ意味の重要性がクローズアップされなければならないと考える。この点に関して、一九四二年に殿木圭一は租界の「セキュリティ」について、次のように定義した（以下、「　」は省略する）。「一方において外部よりの暴力に対する有効なる保護と内部の混乱防止、他方においては財産権をふくむ個人の権利の享有に対する適切な防衛を意味するもの」。(7)

第五章は殿木の定義を援用しながら、各政治勢力にとって租界のセキュリティが持つ政治的意味を分析している。知識人やブルジョワジーが、一九三〇年代半ばの救国運動に関与することができた政治的条件として、中国の主権が及ばないがゆえに、中国国民党（国

民党）の弾圧から民族民主運動を守りえた租界のセキュリティに着目したのである。

また第六章は租界が中国へ返還されたことにより、上海はセキュリティを喪失し、抗日戦争後におけるブルジョワジーや知識人の反政府活動にとって、不利な条件が生まれたとした。

租界のセキュリティが反体制運動の展開を保証する役割を果たしたと見なす観点は、コープルやストラナハンなどの欧米の研究者とも通じるもので、傾聴すべきものである。[8]

さらに第五章は、各政治勢力のセキュリティとの関係の深さにかかわる競合・協力・対立のプロセスへも関心を払っており、注目される。たとえば一九二〇年代半ばの「淞滬自治運動」は次のような内実を持っていたと指摘されている。

ブルジョワジーの自治運動は、租界への対抗というナショナルな契機を内包していたが、他方、上海を中華民国から分離させかねないような「上海市民的ナショナリズム」ともいうべき性質もあった。その意味で中華民国の発展へと収斂していく「国民的ナショナリズム」と矛盾した側面も存在した。

第五章は急進的な労働者・学生のナショナリズムだけでなく、「穏健でそれでいて屈折したブルジョアジーのナショナリズム」へも目配りをし、租界の存在に起因する中国ナショナリズムの複雑な在り様の一端について的確に描き出したのである。こうした分析は、全中国的レベルでのナショナリズムの形成と展開を考えるうえで、また上海を舞台とするナショナリズムの位置を正確に捉えるために、貴要な素材を提供するものであるといえよう。

新たな方法論の模索について

本書の成果の最後として、いまだ具体的な分析方法としては熟していないように思われるが、執筆者たちが上海市民の心情の在り様に着目していることをあげておく。

たとえば第六章は重慶など抗戦中の国民党支配区（大後方）から上海へ帰還した人々が、抗戦中、日本軍占領下の上海にとどまった人々を対日協力者として冷遇しかねなかった事実を紹介している。こうした指摘を踏まえたとき、抗戦中上海にとどまった知識人たちの結集した中国民主促進会（一九四五年）が、なぜ大後方で成立・発展した中国民主同盟や中国民主建国会と比較してラディカルな言論活動を展開したかに関して、理解が深まるかもしれない。[9]

また第七章は、解放後、北京に対してつねに受け身におかれた上海が、プロレタリア文化大革命（文革）の初期に重要な働きをした点に言及している。こうした上海における文革の急進さに対する眼差しを敷衍すれば、上海の北京に対する対抗意識と、文革のラディカリズムとの関連性について考える必要が出てくるだろう。[10]

Ⅲ　今後の課題

都市における社会的結合

一九二〇年代に高揚した民族運動を担った上海の労働者の内部においてさえ、同郷的な紐帯が社会的結合の原理として根強く存在し続けていたことは、中国労働運動史研究会のメンバーがすでに指摘している。[11] また一九二〇・三〇年代の上海における商工業団体と国民政府との関係を論じる際、金子肇は「ギルド的・伝統的な商工業界秩序の強固さ」を議論の前提とした。[12]

本書の叙述の全体的なトーンもまた、前近代的な社会的結合力の根強さに関心を寄せるもののように評者は感じている。

だが第四章は一九一九年の五・四運動を画期とする同郷・同業的繋がりをこえた「新しいタイプの組織」の誕生や、民国期における「弱者の救済への意識」の覚醒に着目した。そして当時の上海における里弄の「都市的な人間関係」の形成を強調している。第四章は本書のなかでは他の章と異り、前近代的な人間関係にかわる新たな社会的結合の生成・発展を上海史の基本的モチーフとしている、とはいえまいか。

上海における社会的結合の在り様に関する本書のズレは、この問題の検討の必要性をクローズアップするものであろう。

都市ナショナリズムの限界をめぐる問題

上海の都市形成の特質を規定した一つのファクターは、上海なりのナショナリズムであった。それゆえこのテーマについては、従来から、多くの論者が様々な角度からアプローチしており、たとえばイエは鄒韜奮が編集し、一九二〇・三〇年代の上海で多数の読者を獲得した『生活』を素材として、この雑誌上に現れた農村蔑視について論じている。[13]『生活』に寄稿した人々は、中国の後進性の根源として農村を位置づけ、都市のみが中国の近代化を可能にするという見解を繰り返し提示した。

また一九三二年の第一次上海事変に際して、上海人エリートたちは、蘇北出身の下層民を貧しさ故に故国を売った裏切者（漢奸）と罵り、「江北人」という蔑称を用いた。ホニグは一九三〇年代の上海の『申報』紙上の記事を丹念に追究し、こうした上海人エリートの「江北人」に対する差別意識は、上海の住民の内部に敵をつくることで民族主義を高揚させようとしたものであると指摘した。[14]

従来、評者も含めて都市知識人のナショナリズムについては、その民主的側面を尊重して議論してきた。本書における叙述もまた、基本的には都市における民主主義的契機について肯定的にとらえている。

しかしながら先に紹介した欧米の諸研究は、都市形成とナショナリズムの関連について、また日常生活のレベルにおけるナショナルな意識の形成過程について、リアルな分析をすることの必要性を強調している。さらには都市における民衆レベルのナショナリズムにみられる民主主義の質の議論の重要性に、注意を喚起した。

上海史の時期区分に関する仮説

序章は開港以後の上海史の流れを、次の五つの時期に区分している。

①【近代都市の形成期】（一九一四年の上海県城の撤去まで）
②【近代都市の発展期】（三七年の日中全面戦争の開始まで）
③【抗日戦争・内戦期】（四九年の中華人民共和国成立まで）
④【社会主義化推進期】（八〇年代半ばの改革・開放政策の本格化まで）
⑤【改革開放・再開発期】（現在まで）。

本書の叙述はこの時期区分に逐次対応しているわけではないが、[15]③以後は全国的な政治的事件で時期区分をしており、②までの都市史的な時期区分のメルクマールといささか趣を異にしている。

それに対して先に紹介した成田龍一は、〝重層的で均一的・均質的都市空間の創出〟の進展度を時期区分のメルクマールとし、日本都市史に関して次の〝三期説〟を展開した。[16]

①【近代都市モデルの形成・都市システムの始動の時期】（一八六〇年代～一九〇〇年前後）

②【近代都市モデル・システムが展開・外延化する時期】
（一九〇〇年前後～三五年前後）
③【近代都市空間の制度化・現代都市空間の胚胎期】
（一九三五年前後～五〇年前後）

評者は本書の党権力による民衆の直接的把握という点に着目する視点や、租界のセキュリティを重視する視点などを継承したいと思う。そうすることで国民党による「一党独裁」の開始や、アジア・太平洋戦争による租界の返還＝消滅を、時期区分の画期とする視角も出てくるかもしれない、と考えるからである。日本都市史研究に学ぶことで、本書の具体的分析から上海史に関する新たな時期区分を想定しうるのではなかろうか。

（東方書店、一九九五年五月初版第一刷、A五版、二八〇〇円）

補記

一　本稿は、広島中国近代史研究会例会（一九九五年一二月九日）での評者の書評報告をもとにしている。成稿にあたっては、当日のディスカッションからいくつかの示唆を受けたが、文責が水羽にあることはいうまでもない。

二　本書は一九九五年九月に第二刷を発行した。この過程で第一刷の表記上のミスはほとんど訂正されたが、なお若干気になる点が残っている。これらの点が本書の内容を損なうものでないことはいうまでもないが、以下参考までに紹介しておく（単純な脱字などは省略）。

◇一二六頁　居留民団は上海居留民団の主要な……

◇一二九頁　「在郷軍人会上海支部」は……在郷軍人会上海支部が組織された。

＊両者とも語の重複。

◇一二九頁　陸戦隊を初めとして陸軍各部の行動を支援し……

＊他の個所が正しく表記しているように、陸戦隊は海軍所属。

◇一九三頁　「明星」（女優）

＊石子順は「明星」にスターとルビ打ちし、男優・趙丹を取り上げている（石子順『「現代教養文庫」中国明星物語』社会思想社、一九九五年）。

◇数字表記の不統一

＊たとえば一六三頁では、三桁ごとに〝,〟が入るが、二四〇頁などでは〝,〟がない

（註）

（1）古厩忠夫「近年来日本研究民国時期上海史的動向」（『日本学者論上海史』復旦大学出版社、一九九三年）。
なお、本書における研究者の敬称は省略した。

（2）一九三〇・四〇年代の上海を舞台に、演劇の分野から日中両国の歴史に迫った斎藤憐の『上海バンスキング』（而立書房、一九八〇年、第二四回岸田戯曲賞授賞）が繰り返し再演されるなど、八〇年代以降の上海ブームには根強いものがある。本書「参照・引用文献目録」収録のものを除き、評者が手にしたものには、海野弘編『上海摩登』（冬樹社、一九八五年）、大城立裕『朝、上海に立ちつくす』（中央公論社、一九八八年）、小泉譲『上海物語』（批評社、一九九〇年）、井上ひさし『シャンハイムーン』（集英社、一九九一年）、ニュー・藤井省三監修『上海』（平凡社、一九九一年）等々がある。

（3）本書の著者の幾人かは「独自の『上海的な』都市文化」を

示す言葉として、「クレオール上海」という語を用いた。ここでいう「クレオール」的な文化とは、土着文化と欧米文化とが「重層的に融合した文化」を意味している。たとえば小浜正子は「東洋と西洋、『伝統』と『近代』は、都市発展のなかで相互に浸透し、影響を与えあって、独特の『クレオール上海』を形づくるようになっていった」と指摘した。

なおクレオール上海については、古厩忠夫「クレオール上海　一九九三年」『東方』一五九号（一九九四年）も参照のこと。

(4) 「あとがき」では「社会的中間層」に「商紳」層を含めるという意味の指摘があるが、ここでは第二章における叙述にそって整理した。

(5) モザイク都市・上海の実相については、第三章が精緻な実証に基づき具体的に分析している。評者はモザイク都市としての上海の姿を描いたことを、本書の方法的優点として評価したい。

だが本書を上海史の通史として読み進める読者の立場からいえば、第三章の叙述を適宜、各章に組み入れ、特別な章として立てない方が分かりやすかったのではないかと考える。あるいは独立した章として第三章を位置づけるならば、アジア・太平洋戦争中の欧米人の在り様まで含める方が、より一貫性があったと評者は感じている。

(6) 成田龍一「近代都市と民衆」（同編『都市と民衆』[近代日本の軌跡]巻九、吉川弘文館、一九九三年）。

(7) 殿木圭一『上海』（岩波書店、一九四二年）。

(8) Parks M. Coble "Chiang Kai-shek and the Anti-Japanese Movement in China: Zou Tao-fen and the National Salvation Association, 1931-37", *the Journal of Asian Studies*, Vol. 44-2, 1985, Coble *Facing Japan: Chinese Politics and Japanese Imperialism, 1931-1937*, Cambridge: Council on East Asian Studies, Harvard Univ., 1991, Coble "The National Salvation Association as a Political Party", in Roger B. Jeans [ed.] *Roads Not Taken: The Struggle of Opposition Parties in Twentieth-Century China*, Boulder: Westview Press, 1992.

Patricia Stranahan "Strange Bedfellows: The Communist Party and Shanghai's Elite in the National Salvation Movement", *the China Quarterly* No. 129, 1992.

(9) 中国民主促進会の政治主張の概略については、民進のイデオローグである馬叙倫や厳景耀に関する平野正の一連の論考を参照されたい（平野正『中国の知識人と民主主義思想』研文出版、一九八七年）。

(10) 楊東平『都市季風――北京和上海的文化精神』（東方出版社、一九九四年）。緒方康「都市の自意識／無意識――楊東平の『都市季風』を読む」（『東方』一七七号、一九九五年）も参照のこと。

(11) 古厩忠夫は中国の労働者内部の「幇組織は、中国共産党指導下の労働運動によって廃棄されてしまったわけではなく根強く生き残った」と指摘している（「中国労働運動史研究の課題」『季刊中国労働運動史研究』創刊号、一九七七年）。本書の著者のうちでは、古厩忠夫の外に、高綱博文・菊池敏夫が『中国労働運動史研究』に執筆している。

また最新の成果としては、上海の製糸女工の問題への論及を含む曽田三郎『中国近代製糸業史の研究』（汲古書院、一九九四年）がある。

(12) 金子肇「商民協会と中国国民党（一九二七～一九三〇）——上海商民協会を中心に——」（『歴史学研究』五九八号、一九八九年）、同「上海における工商同業公会の成立と国民政府」（『現代中国』六八号、一九九四年）。

(13) Wen-Hsin Yeh "Progressive Journalism and Shanghai's Petty Urbanites: Zou Taofen and the *Shenghuo Weekly*, 1926-1945", in F. Jr. Wakeman and Wei-Hsin Yeh (eds.) *Shanghai Sojourners*, Berkeley, University of California, 1992.

(14) Emily Honig *Creating Chinese Ethnicity*, New Haven, Yale Univ. Press, 1992.

(15) 時期区分の問題とは質が異なるが、本書の叙述はたとえば【近代都市の発展期】に第三・四・五章の三つの章を充てるという複合的なものである。そのためか、たとえば孫伝芳と国民党による二つの「大上海計画」に関する叙述が、実際の時間的経過とは逆になって出現するなどということも生じた（時系列的には孫→国民党だが、叙述は国民党→孫）。こうした些細なことで本書の内容の豊かさが損なわれるわけではないが、一工夫あってもよかったように思うのは評者だけであろうか。

(16) 前掲成田龍一「近代都市と民衆」

（広島大学文学部）